

開幕、誘拐

この日、宮園邸に一本の電話が入った。

「もしもし」

「宮園さん……ですね？」

宮園はるかには電話をかけてきた相手は女だと思った。電話に出たときの相手の柔らかな態度と声の高さで何となくそう判断した。

「そうですか？　どちらさまでしょうか？」

「失礼ですが、貴女の娘さんを誘拐させていただきました」

はるかはこの言葉に思わず我を忘れてしまい、そのまま硬直してしまった。頭の中では今の言葉が何度も反芻していた。

はるかが正気に戻ったのはそれからしばらくのことだった。

「も、もしもし！　悪い冗談じゃないでしょうね!？」

「疑われるのも無理はないですね。ならば、これならどうですか？」

相手がそう言うてからしばらくして

「ママあ……」

「絵美!」

電話に出た愛娘の声をはるかが聞き間違えるはずもなく、そのまま受話器に向かって声を張り上げて娘に言葉を送った。

「絵美!　どうしたの!？」

「私、今このお姉ちゃんと一緒にいるの。色々な所に連れて行ってくれるんだって」

「絵美、そこは何処なの!」

「あ、お姉ちゃんがお母さんに代わってって言うから代わるね」

すると、電話の相手が変わって再び犯人が電話に出た。

「どうですか？　これで私が言っていることは冗談ではないとご理解いただけましたね」

「む、娘をどうするつもりですか!？　私の娘を返してください!」

はるかは涙声で犯人に向かって必死に訴えた。

しかし、犯人はうるたえもせずにはるかに向かって言った。

「残念ですけど、娘さんにはしばらく付き合っていたかなければなりませんのでお返しするわけには参りません」

「な、何が望みなんですか!?! お金だったら何とか用意しますから……!」

「別に私はお金が望みというわけではないのですよ。安心してください、貴女さえ条件を飲んでくださればこの子は無事です」

「じよ、条件……?」

はるかには条件と言われて少し驚きと不安が頭をよぎったが、愛娘の無事を考えたらそんなことぐらいどうでもいいと思った。

「飲みます! どんな条件でも飲みますから子供だけは……子供だけは無事に帰して!」

はるかの返事を聞いた犯人は声色に少し喜びの色が混じった。はるかもそれを確実に感じ取っていた。

「ふふ……そう言ってくれると本当に助かりますわ」

「それで! 条件とは何なんですか?」

「こちらが貴女へ提示する最初の条件は“まず夫にこの旨を伝えて誰にも知らせさせずに家に帰させること”です」

「夫を家に……?」

「そうです。但し、誘拐のことを誰にも気づかせないようにすることです。それが最初の条件です。わかりましたね?」

妙な条件だとは思ったが愛娘の命には変えられないと判断したはるかはずぐに承諾の返事を犯人に送った。

「それでは今から三時間後の午後七時にまたお電話いたします。尚、警察にはこの内密にお願いいたします。もし、お約束を破ると絵美ちゃんの命の保障はいたしません。尚、七時にはお二人揃っていてください」

「あの、もう一度絵美の声を……!」

はるかの言葉を聞かずに誘拐犯は一方的に電話を切った。

しばらくの間、はるかはその場から動くこともできなかったが、気が少しずつ落ち着いてくるとすぐに犯人の出した条件を実行しようと携帯電話を取り出し、そのまま夫の直弥に電話を入れた。

「もしもし」

「あ、あなた」

はるかの声を聞いて、直哉は少しおどけたような或いはからかうような口調ではるかに向かって話しかけてきた。

「どうしたんだよ？ わざわざ仕事中に電話をかけてくるなんて」

「あ、あなた、大変なの！」

はるかの声が上ずっていたので、直哉は驚いて問い返した。

「ど、どうしたんだよ？ 何かあったのか？」

「絵美が……絵美が……」

「絵美がどうかしたのか？」

「絵美が……誘拐されちゃったの……」

「ええっ!？」

電話の向こうから直哉の驚く声が聞こえてきた。それを聞いて慌ててはるかが直哉に向かって言った。

「周りに気づかせないで！ 周りに誘拐のことを知られたら絵美が殺されちゃうー！」

はるかのかの必死の訴えを聞いて、電話の向こうから直哉の声が聞こえなくなった。恐らくは、自分のように電話を耳に当てたまま硬直しているのだからとはるかかと思った。

「ちよ、ちよっと待ってる！」

直哉がそう言つとしばらく声は聞こえてこなかった。かわりに、今まで聞こえていたざわめきや電話の音などがどんどん遠のいていった。誰にも聞かれないように場所を変えている、はるかかもそれを直感した。

「よし、ここなら誰にも聞かれない」

直哉の声が聞こえてくると、周りの音はほとんど聞こえなくなりより鮮明に声を聞き取ることができた。

「そ、それより、本当に絵美は誘拐されたのか!？」

「ええ……誘拐犯と名乗る人から絵美の声を聞かされたわ」

「え、絵美は無事なのか!？」

「声を大きくしないで！ 誰かに知られたら絵美が殺されちゃうー！」

はるかのかの訴えで直哉も気を取り直して、声のトーンを低くして話し始めた。

「は、犯人は何を要求してきたんだ？」

「あなたに午後七時までに誘拐のことを伝えて家に戻させることが最初の条件って言うていたわ」

「午後七時までには俺を家に戻させる？ 他には？」

「今はそれだけ。午後七時に二人揃っていることを条件にっていて、七時にまた電話をか

けるって言っていたわ」

「け、警察には訴えたのか？」

「訴えられるわけじゃないでしょ！ 警察に訴えたら絵美を殺すって言っているのよー！」  
受話器越しに飛び込んでくるはるかの怒鳴り声に直弥は思わず受話器を遠のけ、耳を塞いだ。

「わ、わかった。とりあえず、今日は五時には上がれるからそれから家に帰っても七時には間に合う。出来るだけ周りに気づかせないようにするんだったら、いつもどおりの時間に帰ったほうがいい」

「ええ……。でも、早く帰ってきてね」

「ああ。早く帰るから気をしっかりもつんだぞ」

「ええ」

「じゃあ、一度切るからな」

直哉ははるかに向かってそう言って携帯電話を切った。はるかとの通話を切った後に直弥の頭に重くのしかかったのは愛娘の誘拐という事実だった。

絵美が誘拐された

はるかから直接伝えられたとはいえ、まだ信じられない……。信じたくない気持ちで直哉の中にあっただ。

直哉の心の中に絶望と不安の二文字が刻み込まれた。それと同時に、早く家に帰って詳しいことを知りたいという焦燥感にも駆られた。

混乱する頭の中を無理やり整理させて、直哉は仕事場へと戻った。仕事などとても手につきはしなかったが、それでも絵美を救うためなら、と必死になって耐えた。誰にも気づかれないように極力平静を装い、静かに五時になるのを待った。

「直哉、仕事が終わった後、飲みにいかないか？」

誘いをかけてきたのは同期の楠田だった。直哉が高校生だったときに知り合い、今も長い付き合いが続いている。

「悪い。今日は妻と娘に早く帰ると約束しているからな」

「家族サービスか……。相変わらず仲がいいな」

「お前だってあんなに可愛い奥さんに子供がいるんだからたまには早く帰ってやったらどうだ？」

「そうだな……。捨てられないようにたまには家族のために早く帰ってみるか」

「そうしろ」

いつもなら自然に笑いながら交わせる軽口なのだが、今はそんな余裕などなく笑顔も必死で作っているものだった。

そんな軽口を交わしている間に五時を告げる鐘の音が仕事場の中に響いた。直哉はそれを聞くと同時に帰る準備をして、すぐさまタイムカードを機械に記入させて仕事場を出た。今の直哉の心の中には絵美が無事であるか否か、それだけだった。

仕事場を出ると脇目も振らずに駅へと向かい、ホームへと駆け込んで電車の到着を今や遅しと待った。待っている間に気持ちがいらいつき、腕時計と時刻表を何度も見合わせていた。

電車がホームに到着すると一番に乗り込んで、そのまま自宅のある駅まで乗り続けた。まだ終業してから間もないので電車の中はまだ混雑していなかった。会社から家まではたった二駅程度の距離なのだが、その二駅すらも今の直弥には非常に遠く感じた。

流れ行く景色を見ながら、直哉は絵美の無事を祈り続けた。詳しい事情などわからないが、絵美が誘拐されたのなら無事を祈ることしかできないことを直弥は知っていた。

「どうが無事でいてくれ」

その一言を心の中で何度も何度も繰り返した。

電車が駅に着くと、そのままホームへと走った。改札を抜けると、そのまま走り続け、家までまっすぐ帰った。

「ただいま!」

直哉がいつもより少し大きめの声で言うと、居間から目を真っ赤に腫らしたはるかが出てきた。不安で今の今までずっと泣きとおっていた。

「あなた!」

「はるか!」

直哉とはるかは互いに抱き合った。はるかは直哉の胸の中で思いっきり泣いた。

「はるか、説明してくれ。どうしてこうなったんだ?」

はるかはすすり泣きながら直哉に話した。

「最初、誘拐犯って名乗る女から電話がかかってきて絵美を誘拐したって言ってきたの。」

それで、絵美がその誘拐犯と一緒にいることがわかって……」

「お前に条件として俺に誘拐されたことを伝え家に戻るように指示を出したんだな?」

はるかは静かに頷いた。直哉は頭を抱えて目を閉じた。はるか同様、直哉の頭の中も改

めてはるかの話聞いて、何がやらと混乱していた。

「それで、午後七時にまた電話するって……」

「七時か……」

時計を見ると現在六時三十五分、誘拐犯の指定した時間まで残り二十五分に迫っていた。

「とりあえず、犯人からの電話を待とう。すまないが、何か冷たいものを用意してくれないか。ここまで走ってきたから喉がカラカラだ」

「はい……」

二人は居間へ行き、直哉は電話の傍で犯人からの連絡を待ち、はるかは直哉の注文をきくためにアイスコーヒーを作っていた。

いつもなら、直哉が帰ってくると絵美が真っ先に駆け寄って「おかえり」と言ってくれて、それに続いてはるかが出迎えてくれる。当たり前と思えたこの日常が今はとても愛しく感じられた。

「おまたせ」

はるかは直哉にアイスコーヒーを手渡し、自分も電話の傍で犯人からの電話を待つことにした。

直哉は受け取ったアイスコーヒーをほとんど一気に飲み干した。全力で駆け抜けてきたので渴ききっていた喉も、今のアイスコーヒーで十分潤ったし、体の疲れも少し癒えたような気がした。

「絵美……きつと無事よね？」

「当たり前だろ！」

はるかの弱気な発言に、直哉が思わず怒鳴るような口調ではるかに言った。発言をした後で、直哉は我に帰って気持ちを落ち着けた。

「わざわざ電話をしているんだ。きつと、何らかの目的があるに違いない」

「そう……よね」

普段は会話の絶えない幸せな家族が、今日は一変してほとんど会話がなくなっていた。ただ一人の愛娘の誘拐という事実によって。

長い沈黙が続いた。直哉は電話と時計を何度も見て、はるかはただじっとその場で電話がかかってくるのを待ち続けた。

そして

トゥルルルル……

午後七時、テレビの時刻カウンントと同時に宮園家に電話がかかってきた。直哉とはるか互いに顔を見合わせてから緊張した面持ちで電話を取った。

「も、もしもし……」

「どうやら、条件どおりご主人様に帰宅なさっていただけたようですね？」

電話の相手ははるかがさつき話した女だった。はるかにも聞こえるように、電話のスピーカーを通じて相手の声を聞かせた。はるかが頷いたのを見て、直哉も相手が本物の誘拐犯であることを理解した。

「はい」

「どうも初めまして。さて、まずは私の言葉を信用していただくためにこれを聞いていただきますしょう」

すると、犯人の声ではなく、愛娘の絵美の声が聞こえてきた。

「あつ、パパ」

「絵美ー」

愛娘の元気な声を聞いて、直哉は思いっきり受話器を握り締めて声を聞き逃すまいと耳に思いつきり押し付けた。

「今、このお姉ちゃんとお食事しているの。お姉ちゃん、すごく料理が上手いんだよ」

絵美と犯人が話し合わせて「ねー」と同時に言ったのが聞こえた。絵美がひどい扱いをされていないことに、直哉はとりあえず一安心した。

「さて、お嬢さんの無事を確認していただいたところで次の条件を出しましょうか」

突如、絵美の声から犯人の声に代わった。直哉とはるかは悲痛な面持ちで誘拐犯の次の条件を待った。

「では、次の条件です。但し、貴方達夫妻に出す条件はこの二つが最後です」

「わかりました。それで、その条件は？」

「まず一つは最初の条件を守り続けると同時に、奥さんにも誘拐されたことを誰にも言わずに内緒にすること。無論、最初の条件どおりご主人様も誰にも誘拐の事実を明かしてはなりません。いつもどおり過ごす自信がないのでしたら、有給休暇でもお取りになるとよろしいでしょう」

直哉は二つ返事でその条件を飲んだ。その程度の条件なら何の苦もなく飲むことができるためである。

「もう一つの条件は、すぐにこれから警察を呼ぶことです」

「け、警察を？」

さっきまで知らせるなど言っていた警察を呼べという犯人からの条件に直哉は思わず耳を疑った。

「ほ、本当に警察を呼ぶんですか？」

「そうです。但し、周りの住民に警察が来たという事実をわからないようにする。これが条件です。もし、周りの住民に警察が来たということがバレた時は……命の保障がないことをご了承ください。警察にも私から条件がありますので、私から電話がかかるまで大人しくしているようにと伝えてください。無論、この条件を無視した場合も……わかっていますね？」

まるで状況を楽しんでいるかのような犯人を恨めしく思ったが、直哉は静かに承諾の返事を返した。

「それでは、警察が到着した頃にまたお電話いたします」

犯人はそう言って電話を切った。しばらく受話器を握り締めて、その場から動かなかつた直哉は、気を取り戻すとすぐに警察へと電話をした。

二回のコール音の後、電話が繋がった。

「もしもし。110番です」

「あ、あの……」

警察へ電話をかけることなど生まれて初めてのことで、直哉は少し動揺していた。直哉の同様を感じ取った電話の相手である警官は直哉を落ち着かせるように話した。

「もしもし。落ち着いてゆっくりと話してください」

直哉は二度三度深呼吸をしてから改めて電話の向こうにいる警官に向かって話し始めた。

「あ、あの……娘が、娘が誘拐されたんです」

「誘拐ですか！」

電話の向こうの警官も驚いたような声を見せたが、すぐに詳しい事情を聞こうと直哉に向かつて尋ねてきた。

「本当に誘拐なんですか？」

「は、犯人から電話があつて娘の声も聞かされました……」

既に直哉の声は涙声になっていて、直哉自身も大粒の涙をとめどなく流していた。

「わかりました。すぐに警官をそちらに向かわせますので落ち着いて待っていてください」

「ま、待ってください！ 犯人から条件が出ているんです！」

「条件？」

電話の向こうの警官は訝しげな声で直哉に向かって尋ねた。

「その条件とは何ですか？ 犯人から何かを要求されたのですか？」

「は、犯人は私達夫婦に警察を呼ぶように言いました」

「犯人が警察を呼ぶように？」

電話の向こうの警官も、この電話が犯人自身の指示によって行われているものだとは夢にも思わなかった。少なくとも、自分が警官になってからこんなことは生まれて初めてだった。

「それで、周りの住民に警察が来たことを悟られないようにしろと言いました。そして、それを破ったら娘の命の保障はないと……」

「わ、わかりました。それでは、十分に注意してそちらに警官を向かわせますので、どうかそのままでお待ちください」

電話に出た警官は、直哉に何度も念を押してから電話を切った。直哉は受話器を置いて静かに警官が来るのを待ち続けた。

家中がまるで喪に服したような雰囲気にもまれていた。直哉とはるか互いに一言も交わさず、静かに警察の到着を待った。

ピンポン

通報から一時間後、家のインターホンがなった。モニター付きのインターホンでモニターには宅配便の制服を着た男が映っていた。

「どちら様でしょうか？」

「宅配便です。印鑑をお願いいたします」

「はい……」

はるかが印鑑を持ってドアを開けると、何人もの宅配便の制服を着た男が荷物を持って家の中に入ってきた。

「えっ？」

「お静かに」

男の一人がはるかを黙らせた後、警察手帳を見せて警官だということを伝えた。

「失礼します」

警官達は居間の中に入ると、ダンボールの中に入っていた機材を取り出してすぐに準備を始めた。

「ご主人様ですね。私、警視庁捜査一課の桂木と申します」

見た所五十代くらいの男だった。なかなか貴禄のある男であると直哉も張るかも思った。

「宮園です……この度は……」

互いに握手を交わしてソファに座った。

「それで、犯人からの要求とは何なのですか？」

「誘拐犯からは自分の出す条件を飲めとだけ……」

「警察を呼ぶことも犯人からの条件だと通報の際に仰ったようですが、それは本当ですか？」

「はい。誘拐犯は周りに誘拐が起きたことを気づかせないようにと言って、私達に警察を呼ぶように言ったのです」

「誘拐してわざわざ警察を……」

桂木はしばし考え込んだが、そんな桂木に二人は言った。

「あの……娘は無事に帰ってきますよね？」

「ご安心を。我々が必ず犯人を捕まえて娘さんを無事に保護いたします。ですので、我々に協力してください。お願いします」

桂木は二人に強く言った。言葉の言い方の強さでその伝えようとする意思の力も変わってきて、強く言えば言うほど相手に安心感やその逆に不安感を植え付けることができるものだ。

「それで、犯人が出してきた条件は警察を呼ぶことのほかに何かありますか？」

「誘拐のことを誰にも気づかせないようにと私達に言いました。私達に出してきた条件はそれで最後と書いていました。あとは警察に条件を出す……」

「警察に？」

「はい。また、電話をかけると書いていました」

「なるほど……」

桂木は宮園夫妻との会話をそこで止めて、準備をしている部下の方を見た。直弥とはるかもそれにつられて、準備をしている刑事達を見た。

「どうだ？ 準備は出来たか？」

「はい」

固定電話の側に色々な機材が取り付けられていた。会話を録音するための装置、会話を直接聞くための装置などがあつた。

「あとは犯人からの電話を待つだけです。落ち着いてください」

桂木は宮園夫妻をなだめてから窓際に立ってじっと外を見つめていた。壁に囲まれているため、外からは中の様子は見えない。したがって、外から中の様子の変化がわからないので犯人の条件に見事に沿うものだった。

慌しくなっている家の中で、桂木は一人考えていた。

何故、犯人は誘拐したことを警察に通報するように仕向けたのか？

通常、誘拐というのはその事実を警察には決して知られないようにして、犯人と被害者の間で取引を行おうとするものなのだ。それをわざわざ警察に知らせるなどよほどの自信がないと行えるものではない。

それに、犯人が出す条件もその意図がはっきりと掴めなかった。誰にも誘拐の事実を知らせるなどというのはわかる。

だが、その二つの条件を出しただけで他に金や物質を要求していないうちに警察を呼べと言った。ただの営利誘拐ではないと思うが、犯人の狙いが全く理解できないでいた。

そして、警察が着てから二時間ぐらい経ったとき

トゥルルルル……

部屋中に緊張が走った。部屋の静寂を乱すのは電話のコール音だけだった。

「逆探知お願いします」

刑事の一人が備え付けた電話から逆探知をするように言った。その部屋にいる全員の表情が強張って、緊迫感に満ちていた。

「ご主人、電話に出てください」

桂木が促すと、直哉は恐る恐る受話器を取って話しかけた。

「もしもし……」

「どつやら、警察を呼んでくださったようですね？」

誘拐犯は満足したような声で最初にそう言った。

「ちゃ、ちゃんと条件どおり周辺の住民に気づかれないように警察を呼びました」

「ご苦労様です。それでは、ちょっと警察の方に代わっていただけませんか？」

誘拐犯の要求はその場にいる刑事全員が聞いていた。その中で、桂木が代表として犯人と対話することになった。

「警視庁捜査一課の桂木だ」

「どうも初めまして。この度はご迷惑をおかけいたします」

「なかなかご丁寧なご挨拶だな。誘拐をしている人間とは思えないよ」

「それはどうも。残念ですけど長々とお話ししている時間はありませんの。早速ですけど今度は警察に条件を出させていただきます」

「ほう……今度は我々に条件か。言ってみたまえ」

「まずは時計を見てください」

桂木は壁にかかっている時計を見た。時刻は現在午後十一時四十五分だった。

「多少のずれはあるでしょうが、私の時計では午後十一時四十五分を指しています」

「こつちも同じ時刻だ」

「それはよかった。同じ時間を共有している方がより正確になりますからね」

「どういう意味だ？」

「実は、これから私と警察でゲームをしようと思っっているんです」

「ゲーム……だと？」

桂木は相手が自分の一番嫌いなタイプであることを確信した。犯罪をゲームのように考える人間は、ここ数年の間に増えてきて桂木自身もそういう相手を逮捕したり取調べを行ったりしているが、何度会っても腹立たしくなった。

「そうです。私に勝ったら絵美ちゃんは無事にご両親の元にお返しすることをお約束しましょう。但し、負けたら……命はありません」

「人の命をかけたゲームか……」

「そういうことです。どうです？ やってみますか？」

口調は優しいがこれは脅迫に他ならなかった。桂木が断れば、子供は無条件で殺すという言葉を誘拐犯は言っているのだ。

「やるという選択肢しか用意していないのだから？」

「まあ、そう思いたいのならそう思ってくださいだって結構です」

犯人が状況を楽しんでいるのと反対に、桂木の表情はどんどん険しくなっていた。

「で、ゲームのルールっていつのは何だ？」

「乗り気ですね。そこらされると嬉しいですよ」

「いいからルールを教えてください！」

桂木が怒鳴ると犯人は少し沈黙した。

「いやあ……今の大声には驚かされました。思わず耳を塞いでしまいましたよ」

「くっ……！」

「それではゲームのルールをご説明いたしましょう。今、時刻は午後十一時五十分ですね？」

「ああ……」

「ゲーム開始は明日の金曜日午前零時から四日後の月曜日の午後七時まで。それまでに私を誰だか当てられればそちらの勝ちです。チャンスは計八回。毎日、午前七時と午後七時の二回だけこちらにお電話いたします。その八回の間で私の名前を見事に言い当てることできればそちらの勝ちです」

「四日で勝負をつけるという意味か……。もし、こちらが負けたらどうなるんだ？」

「命がありません、とそれだけ言わせていただきます」

「そんな！」

「はるかが犯人の言葉を聞いて、桂木から受話器をひたたくって犯人と話をしようとした。お、落ちていくぞ！」

その場にいた刑事が総がかりではるかを抑えて今から連れ出していった。その間もはるかは必死の抵抗をして、連れ出すのに一苦労していた。

「すまない。少しトラブルが起きた」

「いえいえ。子供をそこまで強く思っているのと知れてかえってよかったと思っていますよ」「親がどれだけ子供のことを思っているのかわかったなら、子供を返してやってはくれな  
いか？」

「残念ですけどそうはいきません。それより、ルール説明の続きをしましょう。基本的なルールはさっき言ったとおりです。それとは別に絶対に守っていただく条件があります」

「その条件とは何だ？」

「まずは誘拐のことを絶対に周辺住民に気づかせないこと。それとゲームが終わる四日後まで何があっても絶対に公開捜査にしないこと。これがその条件です」

「わかった……。その条件を飲めばゲームをやっている間は子供の無事が保障されるんだな」

「勿論です。それでは、また午前七時にお電話いたします」

「待て！ 子供が無事なのか声を聞かせてくれ！」

「もう一度時計をご覧になったらいかがですか？ 子供がこんな時間まで起きているはずないでしょう。とりあえず、大事なゲストですから丁寧に扱っているとだけお約束しておきましょう。それでは」

「おい、待て……！」

しかし、電話はそこで切れてしまった。桂木はしばらく受話器を睨んで、受話器を戻した。

「逆探知、駄目でした」

部下の言葉を聞いて、桂木は大きくため息を吐いた。時計を見ると、時刻は午前零時一分前、ゲームの開始が刻一刻と迫っていた。

「これから四日が犯人と勝負か……」

そして、時計の針は午前零時を回った。

四日間のゲームがここに始まった。